

モーツァルトにみる宗教音楽の世界と作品 (1)

—1761 年～ 1769 年の作品を中心に—

The world and work of Religious music on Mozart

安 彦 正 一
Shoichi Abiko

目 次

はじめに

1. ザルツブルクの景観とモーツァルト
2. 最初の教会音楽とモーツァルト
3. ウイーン帝立孤児院聖堂の献堂式とその作品
4. ウイーンからザルツブルクへの帰郷と二つのミサ曲

おわりに

はじめに

周知のようにモーツァルトの音楽は、我が国は言うに及ばず世界の国々で絶大な人気を博している。その傾向は CD の売れ行きのみならず、解説書の出版など文字どおり多く人々が見ている。そのようなモーツァルトの人気の秘密は、彼の音楽は自然と人々のなかに入っていけるからであり、もう一つの理由は、多くの人が安らぎと癒しを求め、「癒し」という言葉が流行のようにいわれ、その効果はモーツァルトの音楽に効果があるといわれたことも、彼の作品を聴く人が増えた理由の一つかもしれない。K. バルトにいわせしめれば「モーツァルトの音楽は徹頭徹尾重圧感がなく、力みがなく、軽やかである一だからこそ人の重荷を軽くし、心を軽やかにし、開放感を味わわせる」と、的を得た指摘をしている。¹⁾

さて、モーツァルトは生涯 600 余の作品を作曲したといわれ、それらは、いずれも素晴らしい音楽をわれわれに提供してくれ堪能することができる。しかし聴く人の多くは、交響曲、協奏曲、ピアノ曲、オペラなどが大部分であろう。彼の名は主に教会音楽や歌曲によって知られているのではない。この二つの分野のどれを考えても、その業績においては、ともすれば彼より評価を受けている作曲家の名を数えることは容易である。その意味からすれば、彼の宗教音楽について聴いたことがあるであろうか。例えば、聞いたことがある人でも「レクイエム」「戴冠ミサ曲」などを除いて、それ以外の曲はあまり知れ渡っていないため、不当に看過されているきらいがあるのではないと思われる。ことに初期のザルツブルク時代の数多い作品についてはほとんど知られていないし、実際問題として、彼自身この教会音楽の分野で卓越しようと努力し精神を集中した事実は見当たらない。というのも彼の若いころの宗教音楽